

たまいたま

川柳



平成29年
6月号 (No.691)

日川協加盟

巻頭言

国民性というのと

願法みつる

孔子様とは本当に偉大な聖人なのだろうか。論語に説かれる言葉が、少し胡散臭く感じるのには老いの所為か。志学・而立・不惑・知命・耳順・従心とは孔子の一生を回顧した言葉と言われている。六十歳の耳順にしても、七十歳での従心にしても、悟りきった述懐ではなく、悩み疲れた老いの繰り言ともとれる。

しかし何せご本人は中国のお方。それも二千五百年前の広大な地域での戦国乱世のお話。人間の生き方を説く数ある遊説家のお一人だった。位しか判らない。

孔孟の儒教が人倫の規範を説くエリート思想であり、同時代に並び説かれた老荘の道教は、本性のままに生きて現世を楽しむ民衆の思想である。・・と言われる。そんな中国の民衆は、歴史的には徹底した現世至上主義のリアリストなのだそう。つまり建前は儒教、本音は道教だという。成る程、現中国の声高な国家思想と国民本音の乖離状態が、生々しく想像出来る。

日本民族の国民性には、神道も仏教もナイ。真善美の気高いDNAを有しながら、悪魔にさえ心を渡してしまふような細さがある。そんな国民性の中、さいたまの気風は何だろう。まさにこった煮と言う事かも。

日日是好

願法みつる

寄り掛かる民に冷たい仏の目
押し競饅頭ロートルの地獄変
愛と慈悲宗教だけの話題かも
借金大国そんなもんさと青テント
其処此処のブラックホール地球上
タラレバの科学でヒトが生かさされる
癌というオデキへ母はチチンパイ
過労死を心配してる卒寿過ぎ
温室の育ちを嗤う野の苺